

# 動詞の実力を重視しよう

詩人の長田弘は「いまは名詞が多すぎる。そして動詞がすくなくすぎる」と書いている。

現代は圧倒的に名詞の時代だ。私たちはたたくさんの名詞を手に入れながら、しかし、動詞をほったらかしにしている、日本語の動詞はだんだん貧しくなっている、とも書いている。

動詞を多く用いた文章には、はつらつとしたところがあつて快い。たとえば長田弘に「海辺」という散文詩がある。

「波がくずれて、ちいさな塩の泡を撒きちらしながら、波打ち際をすすんでくる。ふいにあきらめて、またもどつてゆく。濡れた砂がいつばいにひろがつて、午後の日の光りに淡く光る。鈍い波がもりあがつて、またくずれて、すすんでくる。寄せてかえすだけの清浄なざわめきのなかに踏み込むと、ふつとすべての音が掻き消えてしまう。黙る。一、二、三歩ある。立ち止まる（以下略）」

この短い文章の主役は名詞でも形容詞でもなく、まぎれもなく動詞だ。数々の動詞のおかげで、押し寄せて、崩れ、戻つてゆく波の姿が生き生きと読み手に伝

わつてくる。海辺に立ち、波の動きをじつと見ている作者の姿がくつきりと浮かんでくる。

たとえばまた詩人、垣内磯子に、こんな作品がある。

「どんな朝でも／起きて／歯を磨いて／朝ごはんを食べて／笑うようにと／子供達には言い残しましょう／いつか私が死ぬ時には！／その時に／笑つて言えれば／なお／良いのですが（以下略）」

ここでは起きる・磨く・食べる・笑うという日常的な動詞が、朝の清々しい光、いとおいしい食卓の様子を読み手に伝えてくれる。垣内もまた、動詞を大切にしている作家だ。

◎ 言語学者の大野晋は、日本の基礎的な古典語と現代の言葉とを比較し、どんな言葉が今も使われているかを調べている。それによると、残存率がい

ばん高いのは動詞だった（86・7％）。形容詞、名詞がそれにつき、助詞、助動詞の残存率は極めて低い。動詞は日本語の根幹をなしているといつてもいい。それでも、動詞は痩せつつある

という危機感が私にもある。

私の幼いころは、「井戸の水を汲む」「算盤を弾く」「風呂敷で包む」などの、手作業の動詞をよく使った。が、日常の暮らしの変化で、「薪で風呂を炊く」式の用例が激減している。一方で、「オープンする」「チェックする」「テークアウトする」「チャレンジする」「リークする」といったカタカナ動詞群が横行する世の中になった。開く、確かめる、持ち帰る、挑む、漏らす、などの日本語の動詞を壁の花にしていけない。

動詞を守ることは日本語の根幹を守ることだ。動詞はさらに、文章にみずみずしい躍動感、現実感、具体性を与えてくれる。

## ●たつの・かずお

朝日新聞社入社。ニューヨーク支局長、東京本社社会部次長、編集委員を経て、論説委員。「天声人語」を13年間にわたり執筆。平成6年朝日カルチャーセンター社長を経て、現在著述業。

